布を創る ⑧

絵師と型彫師と染師で創る現代きもの布地
MARU. STUDIO 丸山正

山 崎 昭 雄

型染小紋絵師、丸山正さんの今日の仕事の下敷きになっているのは、大阪芸大時代の油絵(色と構図)、木を削ったり磨き上げたオブジェとか粘土によるオブジェ(立体構成)、アングラ演劇(パフォーマンス)である。丸山さんは卒業後、グラフィックやイラストの世界にいて、NAAC展で技術賞を受けた。

丸山正さんときもの世界との出会いは、丸山さんが29才の時である。「絵を仕事にするのはやめよう。」と上京、「ニュートラルな状態」「生活のために働くなら、ネクタイを付けた仕事をしよう」と呉服問屋に入り、販売応援のため大型店の売場に立ったのがはじまりであった。そしてここでは、アングラ演劇の下地が生きた。

丸山正さんの創る布は、きもの、帯、袋物や能楽に出で来る翁(おきな)とか鶴匠の被るような帽子や、和様美の小物類になる。

きものや帯の図案は、木の葉や布切れや伝統職人の使う小道具などの形を絵柄にした「型」にし、色彩は黒をベースに、藍・鼠・茶系を使う。花鳥風月に代表される伝統的なモチーフの柄行きではなく、華やかな小紋の色多でもない丸山正の世界を創り出す。

最近、樹の肌や編み立てた竹細工、時代物のワラ半紙やアブラ紙の包装紙、それにダンボールなど、布以外モノから、布地開発のソースを求めている。

また、以前から「きものに対してはシロウトでありたい。でも、布地に対しては自分の素材感を創りたい」と思っていた。最近、中国南部の穴明き布に出会ってから、きものの布地に穴を明けたい衝動に駆られ、帯も含めて、穴明けの快感にはまっている。

丸山正さんの布地を創る作法は、江戸時代の浮世絵師の手法に似ている。

はじめに37cm×12mのスペースに前述のようなモチーフの図案を型彫師が型にし、小紋染師が染め上げる。

場合によっては、紬機織師に糸の太さ、タテヨコの本数および織り上げた風合いを、色と共に指示し、反物としてできて来た布地はさらに、部分的に別途に染上げた柄布でパッチワーク仕上げしたり、小さな穴明け加工したりして1反のきもの布地に完成させる。

帯地もきものと同じ作法で創り上げて行くが、色柄については、ミスマッチの中に着る人の個性を生み出すものではないかと考えている。つまり、同色や同柄でコンビネーションを計るよりも、個性を活かしたミスマッチのコーディネートの方が、たのしきは倍増すると考えているわけである。

現在の丸山正さんは、小千谷産地と組むことが多い。はじめ、およそきもの地の既存の作法にはない、「きもの図案というより、連続するオモシロイ形を表現」した小紋柄のため、どこの紬機織師も染師も「これはきものではないからやりたくない」と断られることも多かった。色にしても基本の12色という伝統的な色見本帳にはないものだからでもあった。

産地には、何度か出会ううちに、きものの常識を破りながらも、不思議な、それでいて新鮮な現代の和様美、伝統にこだわらない自由な発想を受け入れる職人グループができた。

丸山正さんは、自分のきものデザインの世界を「黒物着(くろものき)」と名付けた。ことして8年目を迎えた。

Textile Creation

著者紹介 AKIO YAMAZAKI

山崎事務所代表

著者は、アパレル・きものを中心としたマーケティングの研究を御専門とされ、著書に「最新現代経営講座 マーケティング」(総合法令、1996、共著)、「アパレル産業ハンドブック」(東洋経済新報社、1996、共著)他がある。本稿では、「産業の空洞化」に抗して、日本のクリエイターたちの「布を創る」努力と業績を紹介していただいた。

「創る」という世界は、前述の学生時代に色と構図と立体構成を学んだことがベースとなっている。そして、生まれて来た布地は、歴史を遡って大層の昔、平安の御代の「媼(おうな)」や「翁(おきな)」の雰囲気(かも)しているという事もある。

ふつうの布地を創る人の仕事は、アイテムの材料として提供したところで終わる。しかし、丸山正さんの場合は、サブタイトルにあるように創るに留まらず、見せる・売る世界まで含んでいる。

「きもの創り屋というのは、あくまでも“素材屋”であるべきだ」と考えている背景は、洋服の世界と違って、フォルムは完成された美であるから、素材で変化をもたせる必要があり、そこに自分のクリエイションの冥利(みょうり)があり、存在感があると語る。

「布地に対しては、自分の素材感を創りたい」という丸山正の仕事場

しかし、丸山正さんの場合はさらに「自分の布地を人がまとうことによって、本人でも気づかなかった新しい世界を見つけ、そこに遊ぶことができる、そんな思いを忠実に創っていることを、人に伝える場をつくり、直接届けたい」と思っている。

つまり、展示のスペースも販売も丸山正さんのクリエイションの世界だと思っている。

案内状から始まって、展示スペースの構成、演出は、学生時代のアングラ演劇が下敷きとなっている。

黒い40cm×20cm程の板の上に、たとえば、「波に月」というテーマであれば、1反の布地は、さざ波に大波のように流し置きにしたり、自然派を強調するように、40cm程の黄味色のワラをたばねたものも陳列小道具に使う。

最近では、年に一度六本木で展示販売会を行う。その時は、高さ50cm位にして畳一枚程の黒い板の上に、1点ずつ展示し、その会場の少し端に、前述の穴明け作業をする板場をつくり、豆電球をつけて仕事をする女性(黒物着に羽織姿)を置いている。

もう一つの丸山正さんのクリエイションが「販売」の作業である。

人の体に、1反の布を「巻き付ける」手法は、東京へ出て来て呉服問屋にいた時、派遣先で覚えたことであるが、彼は、このパフォーマンスは、クリエイションの環と位置づける。

つまり、布地を着る人に「巻きつける」パフォーマンスは、彼にすれば、演劇的な要素をもったVP(ヴィジュアルプレゼンテーション)であり、単なるモノの移転ではなく、人の変身願望とたのしみ願望を充足せしめる価値の共有であり、それは送り手にとっては、クリエイティブな活動だというわけである。

しかし、この場合、自分をニュートラルな状態にして、自分の恥部を捨てる精神にしておかないと成功しないといふけ加えた。

再度あげるが「布地を創る」という丸山正の世界の場合は、創る・見せる・売るという行為を自分のインスピレーションに基づいて、一貫させて表現させるところにある。

1997年1月のテーマは、「タカガきもの——」であった。彼の母親が、何かの折にふっといったコトバであったが、どんどん好きになっていくきもの創作活動に対する自分へのなげかけのコトバでもあった。「……サレドキもの」となるかは、その後の仕事振りに表れていた。98年は4月に「ごく・ふつうのきもの展」というテーマで発表することになっている。

紬という先染に後染をしたり、途中から切ってパッチワークにしたりして1反の布地にする型絵染手法は、これまでに会ったことのない日本の様式美を醸(かも)し出し、伝統の流れに、新しい水を汲むが如き新鮮な布地創りとなっている。

88年に「きものデザインランプリ」を受賞した。

MARU. STUDIO

東京都麻布台1の1の20 麻布台ユニハウス109

電話：03-3583-0814